塩原繁昌記

全

ル 4
3507

門ル4 3507
門ヲ6 3172
ル石4 2171

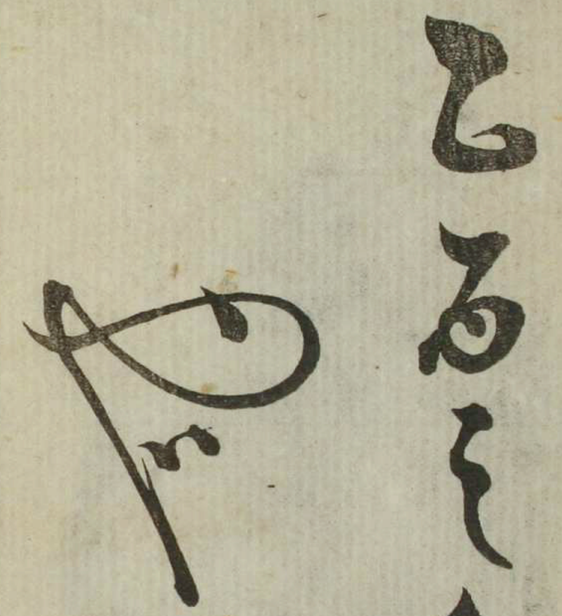
錦石秋編輯

鹽原繫昌記

君嶋氏藏梓

老

悅



塩原繁昌記

緒言

信夫恕軒翁紀念
大正三年四月
信夫淳平氏寄贈

抑々塩原の開闢い何年以前ふ為りて何人の創草と云ふ事い慥ならぴと虽ル事跡を以て考ろふ凡そ千有餘年ふい至ろ古るべし此地よりや雲煙深く鎖し山重り谷阻りて元人を通ぜぴ神仙獨居を占て幽邃殊ふ甚し山中ふ温泉あり能く病痾を治せるをルて徑路漸く

開け山間の人民各處ふ浴室を營こて遊客を待ふ至る然れども岨道の嶮惡なる輿丁馬蹄の通過せる所ふ非ズ故ふ偶々暑を避け病を養ハんと欲せるも歩行の困難なるを恐れて猶豫せる者多しと聞く時なるなを茲ふ明治十七年夏前栃木縣令三嶋君大ふ土工を起し懸岩を截開き或ハ谷を埋め橋を架して一條の坦道立所ふ成る其工事の廣大なる竣工の

速なる人をして驚歎せしむ功成るの日より脆車疾く馳せ駕輿安らふ行き運輸の便元より論を待ざるなり加之沿道到る處風景の見べき物ありて更ふ瘦脚の勞るゝを知らズ之ふ於てか夏秋の間生を養ひ勝を探るの人日山群を為て客樓充満せり夫蓬莱の仙境も道無き ハ行べ からズ歐州の文明も船無き ハ見ること能ハズ海陸共ふ其便の貴重なる亦

言を待たず予本年此地ふ遊び山中の繁昌を見て自謂らく設令山川の勝温泉の功あるも道路洞通せざるハ何ぞ今日の繁昌を致さんや因て聊か山中の景況を記して塩原繁昌記と題し以て遊客午睡の一粲ふ供せ

明治十八年初秋　　編者誌

塩原繁昌記

磐城國　錦　石秋編輯

塩原ハ塩谷郡の北端ふありて東西五里餘り南北四里許り上中下及湯元塩原の四箇村ふ分ち家數百三十餘戸連山東西ふ亘り箒川ハ村の中央を流れ下塩原ふ至り鹿俣川を合せ東流して中川ふ入る温泉の所在ハ下塩原の部内大網福渡戸塩竈塩湯畑下戸門前古町外

湯元塩原の八箇所なり此咽喉の處を関谷と云ふ塩原境大網迄一里半許り道路平坦灣曲して山腰を旋る道ふ垂るゝ懸嵒ハ削りて建屏の如く岸ふ臨む盤石ハ疊みて防壘ふ似と り足下の谿水ハ岩石を穿ちて山岳を動ろし頭上の峰巒ハ虚空ふ聳えて雲霧を起す沿道槁あ主ハ必瀧あり瀧あ主ハ必風致あり其數十を以て算ふ就中見返瀧と云へるあり瀧ふ

架せる槁ふ見返槁と唱ふ此瀧ハ深山叢樹の中より流れ来り槁下を過て遂り飛事三十余丈實ふ壯觀と云ふべし之ふ次者を猿沢瀧と なを高さ十丈餘り直流又屈曲水細しと雖ふ或ハ玉を垂るゝ如く或ハ糸を懸るふ似て風姿愛ぶべし都て此辺ハ瀑布の觀あるのミならず奇景幽勝所として有ざるなく思ハ歩を進めて大網ふ至る

見通瀧及大綱之圖

○大網　客樓一棟あるのみ宏壮をらざるも
新築の二階造りゆて見困しあらに浴槽ハ
二坪川の辺ゆありて二町余の急坂を降る
所なるハ御苦勞至極なり功能ハ癩疥瘡毒
等ゆ尤宜しと聞けり此上流ゆ區々龍瀧と
云へるあり恰も龍の卧よるり如く覆流め
懸泉ゆ鱗魚の勢ひを止めら玉岩下の淵ゆ
ゆ玉居て鰓を並べ鱗を飜へを偶々龍門の

志あ玉ハ鼻曲りの異名をとる故ゆ俗呼て
魚止瀧と云ふ近頃有志者相謀りて魚梯を
設るの舉あるやゆ聞く若此舉成なバ浴場
ゆ魚肉餘りあらん又僅の川上ゆ児淵と云
所あり大石両岸より逼りて淵底計り知ら
ず昔或僧一人の児を携へ入浴ゆ来りて
寵愛淺からぬ翌年又二人の児を連来り後
の児を愛せる事いと深りりけ玉バ先なる

兒我寵ゝ衰へとるを恨ミ此淵へ身を投て
死しとりと云ふ爰を遡ま い布瀧と呼へり
あり一條ふ直流して布を引ふ異なられ是
又壯觀なり大綱より福渡戸迄行程凡五六
町其間ふ洞門あり長さ十五六間穴の大き
四間許り之ふ八ま ハ盛夏猶膚ふ粟を生に
曾て聞く関谷より塩原迄馬道を開きとる
ハ安貞二年の事なりとあら 指を折まハ

六百五六十年ふ及べり而来歳を積ミ月を
累ね道筋を撰ミて開鑿修繕ふ力を盡をと
雖ふ三四里の間ハ嶺を越へ谷を渉り斜道
旋りて羊腸の如く其嶮惡譬ふるふ物なし
就中洞門の上ふ方りて左轍と云へるハ一
夫万人を支ふる所ふして危ぶむなりの
桟を渡し巔を望めハ眼眩ミ崖を覗げハ足
震ふ 桟や命をこのうちむ なでこのつら 」と芭蕉翁ノ

申さるし木曽の桟よりおよそ劣らぬ難所
なり鞦ハ元来十六條の矢を挿え右の肩へ
脊負ふ物なるゆ昔或武將此所へ来掛りし
時岩石ふ鞦を支へられて通るを得ル因て
鞦を左の肩へ直し辛ふして通りけるゆゑ
左鞦と唱へしとそ今塩原ふ遊ふ者ハ輿か
乗り車を走らせて斯る艱難を知らぎるハ
聊ゝ書して往時の俤を残し也

○福渡戸　八口の畑中ふ二の浴槽あり此處
ふ行在所新營の擧あるやふ聞及へり川の
向ふなる岩窟よりゆ湧出るハ岩の湯也手前
なるハ冷湯淡湯躾湯合せて四坪あり功能
の槩畧ハ卷末ふ掲けあるハ一覧の上入浴
あるべし當所ハ物品を商ふ家なく客樓の
みよて槙野屋坂口屋吉野屋玉屋松屋和泉
屋叶屋丸屋升屋山形屋磯屋の十一戸なり

皆二階造りの樓を構へて各々浴客百有余人を容るべし都て塩原山中の温泉ハ客室毎ふ火爐を設け戸棚其外俎板庖刀摺鉢等ふ至る迄一切世帯道具を備へ置自ら炊く者ふい賃與へて用を便ずる事なり依て米味噌干魚の類を携へ来りて入浴ずるもあり又ハ米塩を樓主より乞受け自ら炊くもありて誠ふ氣樂なる有様なり保し旅籠を

要ずる上等室ふハ世帯道具抔の設け無く苞穭敷皮の類を用ひて隨分鄭重の座席もあるやう也夏秋の間ハ山中到る所浴客群集して樓々空室なく或ハ酒を呼者あり或ハ餅を喰ふものあり思ひ〳〵の快を盡して笑語の聲殊ふ喧びすし加ふ小手品手躍の諸藝人を初め藝妓なとも入込て樓上樓下湧ろ如く前代未聞の繁昌なり此上ふ又

福波戸之図

輿舁の鐵道開けをハ猶一層の盛況を見るふ至るべし此地三四年前迄ハ運輸の不便なるゝ故ふ諸品の價意外ふ高ろうしろ道路開鑿の功成りてよりゝ物價頓ふ低落して大ふ浴客の費用を減ぜあふ至るゝと誠ふ是山中の景氣を増のミならず入浴の人ゝ客易く宿痾を洗ふべし其一日の費用大抵左の如し但年々樓主等共議の上之を定む

一旅籠　七五錢以下拾貳錢迄

一中食　拾錢以下四錢迄

酒ハ旅籠の外を差と割より安く上酒壱合貳錢内外又自ら炊く者一日一人の入費

一宿料　四錢五厘

一蒲團壱枚貳錢　是ハ借りを差ハ拂ふふ及ハに

一湯錢　五厘

一薪壱束　五厘　壱束よて一人分の飯汁を炊くふ足る

○塩竈　福渡戸より本道僅五六町を出てに
右の山手ゝ天狗岩と云へるあり高さ数百
仞亭々として雲を凌き獣も近付事能はに
鳥も翔る事能はに頂上ゝ松樹枝を雑へて
實ゝ天狗の巣窟ゝと疑はる又左の川中ゝ
野立石と呼ぶ盤石あり高さ二丈餘り上ハ
平らゝゝして竪十二三間横八間許り松樹
蕭疎として趣殊ゝ宜し昔蒲生飛彈守氏郷

此山中を通行の砌野立せし所と云ゝ近頃
當村の某氏石上ゝ茶亭を構へて客を待の
計較あり上思ゝ好き納涼臺なるべし此
数十歩の上流ゝ矢板某の屋敷地あり鬱樹
懸岸ゝ臨み奇石中河ゝ横ハる若一亭を
設け石ハ清觀果て多あらん此地の温液ハ
坂下湯風呂湯熱湯の三槽なり熱湯ハ常ゝ
沸騰して浴もべからに家屋ハ七八軒あり

とゝ客舎とてハ一戸も無く福渡戸塩湯等
ゝ滞在の客来りて入浴せるゝ過きぬ之を
古言ゝ渡りと云ゝ然るとも此辺ハ所々ゝ
名勝多く徜徉緩歩せハ神氣の爽なるを
覺ゝ道の左ゝ獨乙全權公使品川君の別荘
あり溪流ゝ臨み青山ゝ對して風致更ゝ倫
無し又右なるい君嶋氏の荘園なり庭中ゝ
美人高尾の碑記建てり北山山本先生の撰

文ゝ係る其畧ゝ曰高尾ハ塩原山中塩竈の
民家の女ゝして吉原街三浦楼第三世の名
妓也容色諸藝共ゝ前後ゝ比なきを以て其
名一時ゝ震動せ當時公子富豪千金を擲ち
て一笑を買んと欲せるも容易ゝ其期を得
る能はざる也一旦東國の大守ゝ贖ひ去ら
るゝゝも高尾敢て喜ゝ色なく操を情人ゝ守
り大守の意ゝ隨ゝハ遂ゝ三又水上ゝ

塩蓋

害せらる云々此一事ハ小史ハ綴り劇場ハ
演して普く人の知る處なり或ハ云ふ害ハ
遇ふの事後人の浮説ハ出てゝ必しも實なる
らん一説ハ高尾性質閑雅窈窕早く妓籍を
脱し黒髪を薙て佛ハ帰依し小庵を結ひて
獨風月を樂む臨終の日紫雲室ニ入り諸佛
来り迎ふ日本堤の辺道哲庵境内ハ今高尾
の墓あり墓を環りて紅楓樹を植ゑ蓋し其

名ハ象る云々前後の二事何れ是なるを
知らんと虽とも高尾出所の家今猶塩竈ハ
在て高尾の遺書を存せ此地の産なる
ことハ疑を容れ斯る山中より天下ハ名を
轟ろしとる絶世の美人を出せるハ亦奇と
云ふも餘りあり予思ハれ俳句を口走りて
つくづくと夕氣こめる人を待後ハ人ちり
大笑して嗚呼物好なるかな

○塩湯　塩竈と塩湯の間ハ箒川を堺とす此川ハ架する橋を塩湧橋と云ふ明治十七年の新造ハ係る山中第一の長橋なり是より十町許り新道をわけい温泉に至る浴槽ハ塩湯醫王湯相並びて二坪あり功能の大畧巻末ハ載之を啗めハ其味殊ハ鹹ゆし古人の俳句ハ

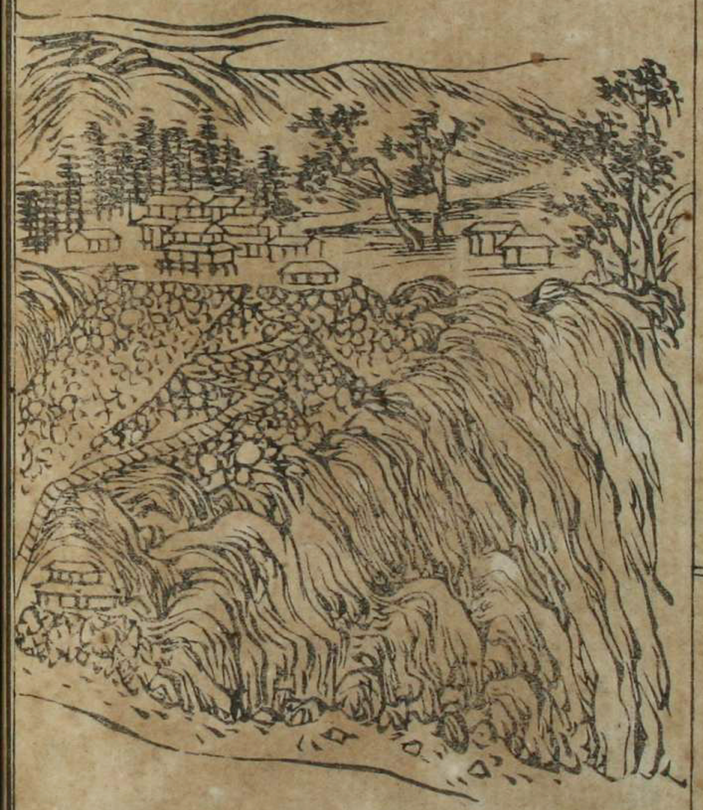
「山姫も業の情よ梅つけん」と云へるもの云ある哉凡て此山中温液ハ勿論土石ハ至る

迚多少塩氣を含まざるハなし塩谷郡或ハ塩原杯と云も是等より出とる称号なるべ客楼ハ明賀屋玉屋柏屋の三戸なり中ハも明賀屋の構へハ家屋十棟許り悉く懸岩を截開きとる所ハ建並び二層あり三層あり規模宏壮ハして浴客五百人を容へく楼ハ東ハ面し鹿俣川ハ楼下を流れて泉聲晝夜危石ハ咽ハ楼の四面ハ山を遶らして世塵

ふ遠く宛ら仙郷の思ひを為せり此地ハ
遊ぶ者ハ只ふ温泉の久痾を醫さるあるの
ミならず風月長しなへふ樓ふ滿ちて生を
養ふの料招かれして来る入浴の人必此ふ
来るの遲きを恨むさるべし此後ふ方りて
甘湯と云ふ所あり茅屋二戸山田を耕して
僅ふ生計を營む湧湯一箇所あるとも微温
ふ過て肌ふ適せず又此乾位ふ古城趾あり

城山と唱ふ今より四百年以前應仁の頃迄
ハ明賀屋の祖先君嶋信濃守居城せりと上
塩原鎮守の棟札ふも奉内野護現靈社一宇
大旦那君嶋信濃守と記しさり此君嶋氏ハ
宇都宮家の一旅ふて三家の一と称せらる
城の麓ふ温泉あり宇を明賀と云ふ此處ハ
君嶋氏の別荘なりよし此時ふ當りて海内
兵乱相踵き宇都宮家も漸次ふ衰へて一族

塩湯之圖



離散せるふ至るゝ之ふ於て君嶋氏も城を退き土着して明賀の別荘ふ移り更ふ塩湯を開きて客舎を業と為せり爾来連綿と業を營こ来りしふ寛文十年大雨の節俄ふ後の山崩き家屋蔵庫を合せて土中ふ埋められ止を得ず旧地を棄て塩湯を増築して一家之ふ引移り旧ふ依て客舎を營業とを故ふ明賀を以て屋号と為と云ふ

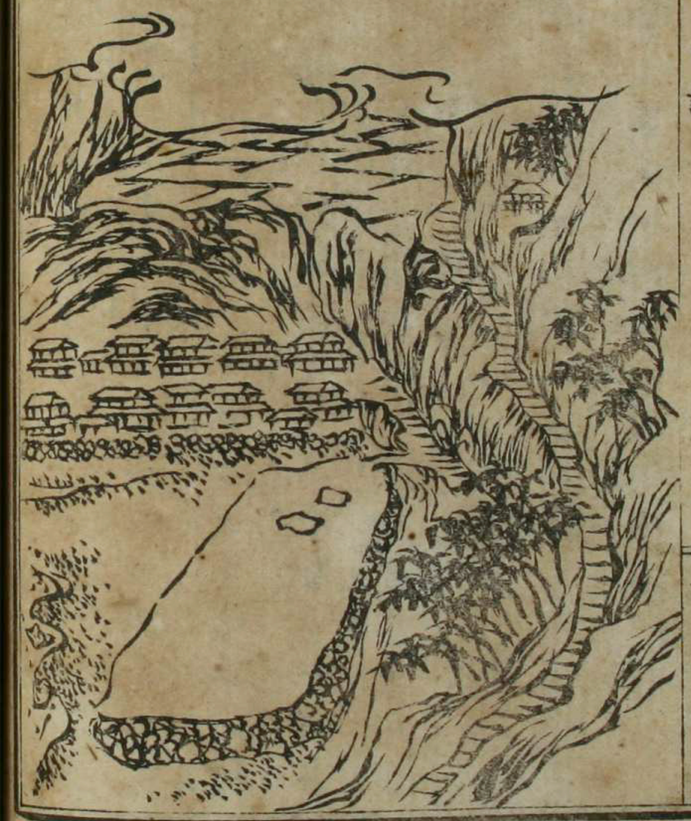
○畑下戸　畑下戸い塩竈と門前の間ふ在て本道より僅ゝ降り也浴槽ハ本湯中湯・塊湯・搭湯の四坪あり（功能の大畧巻末ふあり）此外ふ一箇所搭湯と称せる物あり是と亦何ふ因て名附けとるを知らに俗説ふ昔一頭の猪あり断岩を踏えつして谷底へ陥り腰脚を傷めしふ夜々此温泉ふ浴して治せしゆゑ搭湯の名ありと云へり家数ハ十一戸あり是と客舎ハ

大和屋伊勢屋佐野屋井桁屋紙屋の五戸也
家屋の構へハ福渡戸ハ及ハざるとも皆二
階造りふして相應ふ出来とる普請も見ゆ
地形ハ一層低く後ふ丘を負ひ前ふ川流を
抱く川の北岸ハ灣形の河原ふて其中ふ廣
大なる土工あり東西五六十間南北六八九
間方形ふ高く石垣を築揚とり是栃木縣令
樺山君が別荘の敷地をりと云ふ此地内の

西寄ふ泉池あり其水ハ溪流南より石垣の
底を貫きて池ふ注き更ふ貫きて北ふ流る
又泉池の傍ふ温液あり元河原湯と称せる
もの是なり是より右手ふ方り南の出崎ふ
新しく見ゆる二層楼ハ宮内大輔吉井君の
別業なり川を隔てゝ南崖ふ懸る瀑布を
吉井瀧と云ふ蓋し大輔の別業ふ因て名附
とるならん此瀧ハ屈曲とる岩面を奔流せ

る事十八九丈流々斜々奇中ふ幽趣を具へて清觀雅人の腸を腦を嗚呼大輔の別業や臥してハ泉石ふ枕し坐してハ瀑布を望み夏ハ滿川の清風ふ三伏の熱を消し秋ハ前山の紅葉ふ三秋の愁を忘る不老長生の術座ゑらふして得とり何そ必しも仙道を學ハん又此部内須巻と云へる所ふ温泉場あり径路を登る事八町許り湯守ハ根本氏二階造の樓を構へて可なり手廣く酒食共ふ客の望みふ應じ中ふも名物の團子あり一盃二錢下戸も上戸も爭て之を喰ふ浴槽ハ樓ふ接して二坪同質の温液なり一坪ふ六筋の龍を懸く故ふ瀧の湯と称也之ふ浴して腰を叩ゥせ頭を打せて上症を引さげ更ふ樓ふ登りて一酌し醉ふ乘して午枕を呼ふなと真ふ人間の小極樂

畑下戸ノ図



○門前　畑下戸の西ふ方り塩竈より本道七八町ふ過れ八口の道端ふ二槽の温液あり、自樂房湯と称き次て下湯、河原湯、合せて四坪ありり（功能の大畧巻末ふあり）家數十四戸半ハ物品を商ふ客樓ハ和泉屋、福田屋、疊屋、松本屋、関東屋、山口屋、の六戸ふて戸長役場あり、郵便局あり、此山中ふて都合よき處なるべし、道の北側ふ前の栃木縣令三嶋君ゟ別荘の數地あり、數十間の間方形ふ石垣を築き、更ふ西北の隅ふ一段高く同様の石垣を築きとり、嗄呼昨日迚馬足ゟ立ざる山中ふ貴顯方の追々別業を構へ、並園を設るハ道路開鑿の功ふあらばして何ぞや此辺ハ山あるとゝ雖ふ逼らば川あるとゝ麓を流れ川を隔つる山田ハ段々ふ疊と姥捨の月を移して風景云ばありなし、又部内ふ妙雲寺と云ふ

寺あり甘露山と号を中興開山ハ佛國禪師の上足大同和尚なり其緣起の畧ハ曰ハ此寺ハ小松内府平重盛卿の嬢母妙雲尼公の開基なり釋尊ハ西天竺毘首羯摩天ヶ栴檀香木を以て刻む靈像ハして内府の常ハ帰仰せる處則本朝三釋迦の隨一也其濫觴を原ぬるハ壽永の昔平家一の谷ハ敗北して氏族盡く流離せ時ハ源頼朝公威を海内ハ振ひ平氏の遺族を索めて漏さぬ之ハ至て邦畿千里身を匿せ地なし然るハ平家の士筑後守貞能入道素宇都宮朝綱と姻姫の親ニあるを故ハ妙雲尼公を誘ひて下野ハ下る此像ハ内府の遺愛なるを以て棄去ハ忍びぬ笈中ハ納めて自ら負ひ来り朝綱ハ依て身を遁るヽの道を謀る朝綱鎌倉の聽事を懼まて皆て留めぬ夏ハ藤原の山中ハ

送りて跡を晦ましし影を隠を貞鉄自謂らく
山淺くして人近し宜く幽谷ふ移るべしと
遂ふ塩原の山中ふ分入り草庵を結びて此
靈像を安じ信心を晨花の紅ふ染め戒光を
夜燈の燈ふ照をこと幾歳月なるを知らに
妙雲尼逝をるふ逮び其法名を寺ふ題して
妙雲と号を云々寺の西北隅なる瀧の傍ふ
今禪尼の墓あり笠石ハ九級塔石ふ文字を

刻せに古色宛然として實ふ鎌倉時代の物
と思いる又寺中ふ永禄五年の華鯨勸進簿
を蔵を殘夢禪師の筆跡也書法絶妙唐代の
調あり一説ふ義経の臣常陸坊と云者義経
蝦夷へ渡海の後所々を遍歴して遂ふ入禪
し後又仙術を得て千歳の壽を保ち一たび
雲巖寺ふ住して殘夢と号をと予今是非を
論ぜに茶話ふ聞慶を筆をるのみ

門前古町市街之圖

○古町　門前と古町の間ハ僅ニ一橋を隔つるのミにて宛ら一部内ニ異なられ此橋上より眺むるハ川の南岸ニ數條の温泉瀑懸りて奇觀限りなし瀑布の此方ニ不動湯あり内ニ不動の石像を安置湯ハ熱ニ過て浴セるニ堪ヘ又橋の袂ニ瀧湯あり温瀑を引来るをもて此名あるゆゑ次て中湯角湯御所湯合せて五坪あり功能の大畧御所湯巻末ニあり

元鹿湯と称セ昔此辺ハ芦茅茂りて所々ニ温泉湧出セ或時渡辺某芦の中ニ鹿の潜ミ居るを見付之を打んと鏃炮を携ひ来りしに鹿其機を察し逃出せしゆへ某山麓ニ逐至りて打止よりて之を捜セるニ此鹿前方より足ニ疵を受てありしと因て考ふるニ獣類も温泉の功あるを知りて浴しよる者と見ゆ疵持足の速ニ走る事能ハざして

於是よるこを憐きたり今温泉社内なる十二俣の大角ハ此鹿なりと云ふ故ふ浴槽を開きて後ゝ鹿湯と唱へしを喜連川御所の入浴ありてより御所湯と改めしとたん此町ハ家数七六戸両側ふ物品を商ふ店簷を連ねて住ゝ内客楼ハ角屋若荷屋中會津屋永樂屋鈍子屋會津屋稲屋那須屋米屋萬屋常陸屋の十一戸也皆相應なる家屋を構へ

二層あり三層あり中ふい内湯杯を設けて目立普請ゝ多あり此度ハ塩原山中人家稠密の場所より門前より續き恰も宿驛の趣を為せり是より會津若松迄行程七余里新道開鑿以来運輸の便殊ふ宜しくさしゝ嶮しき山王峠ゝ車を下らにして往復なる山至る故ふ入湯ふ来る客のミならに往還の旅人ゝ温泉ふ浴して足を止め馬ゝ駄し

天秤を肩ふれる商人も利潤の餘りあるべ
湯ふ入り一合の徳利を傾けて數日の勞を
慰む此處ふ溪山の勝を談ずる雅客あるべ
彼處ふ賣買の利を説く商賈あり或い紅粉
を携ひとる富人あり或い温液を嚮る患者
あり雅俗恵樂樓ふ満て其繁昌云ふ方なし
此山中昨日の寂寥ふ引換へ無比の盛況を
見るふ至るハ六千歳の一遇と云ふへし

○中塩原　中塩原ハ古町より續く本道なり
中上の両村ふハ温泉の所在無く民家も山
腹山趾ふ散在し農業を務め獣猟を為て生
計を營めり八口なる川の北岸ふ孤山あり
峰頭ふ松樹鬱々として翠を重ねとり古へ
塩原八郎家忠と云者ゝ居館せる趾なりと
左の森ハ八幡宮の社内なり建久の昔伊豆
冠者有綱ゝ勸請せる所なりゝ後嘉吉元年

君嶋信濃守再興して弓矢の神と仰く今猶
塩原山中の惣鎮守として諸人崇敬せり社
内ふ大杉樹並びて二本あり一本ハ周囲四
丈ふ近く一本ハ三丈許り幹高うらぎるも
枝葉地ふ垂て稀有の大木なり之を以て人
皆逆杉と称せ是より東ふ方りて洞窟あり
深さ二丈餘り其底より脇へ入る事二三十
間通りて北崖ふ達せ万治初年迄ハ八幡社

内の方へも一條の洞穴通りてありしり同
二年の大地震ふ岩石崩れて塞りしと云ふ
土人等昔源三位頼政此岩窟へ隠れしゆゑ
源三窟と唱ふるなと云へり又八幡社前の
川向ふふ方るを幕岩坪と称せ此地の絶壁
ハ削るり如く横ふ引よる筋あるをもて幕
岩の名を負ハせり是より本道を旋り行い
道の傍ふ有綱の社あり有綱ハ三位頼政の

嫡男伊豆守源仲綱の子ふして伊豆冠者と
号し源義経の婿と為りて武功ある事人の
知る所なり義経奥州下向の砌跡を慕ふて
来りしも道既ふ塞りて通るを得ず此山中
ふ匿まて時の至るを待つ此事早く鎌倉へ
聞え如まバ取敢ず打手の兵を向らましも
とも嶮岨ふ支へらまして戰利あらぐして帰る
山中ふ今戰茅戰場杯と唱ふる所あまハ其

頃の古戰場なるふや有綱も終ふ志を得ず
當村の字小田ゥ市と云所ふ共て病死を後
天文七年神ふ祀り有綱神社と号せりとも
却説源三窟の説を聞くふ三位入道宇治川
敗戰の時自殺と偽り関東へ落て此岩窟ふ
潜ミ匿まて再び兵を挙るの志ありと按るふ
入道歳既ふ七旬ふ餘まり何ぞ宇治ふ死ず
して汚名を残さんや又入道の三男宇治を

遁て此山に隠れし故源三窟の名ありと
是亦取に足らん三男は帯刀先生義堅の嫡
男にして義仲の兄也義堅の死後頼政養て
子とす父子共に宇沼に自盡したる事は
歴史に載て疑ふべきもあらざれ之は全く
孫の有綱ら此地に終りしを以て附會し
たるものならん是より八九町行は小流
を隔てゝ中上塩原の堺標を建とり

○上塩原（一に八塩原とも称せり）旧會津街道の要路に
當り後は尾頭峠に通じ前は黒嶽の碧翠を
掬し塩原極西の地にして一路萬木の中に
隠現し寸人尺馬崎嶇の間に出没す村人に
一奇翁あり細井又三と号す歳既に七十に
近けれとも高屐を穿ちて杖つくに細字を
讀み眼鏡を用ひず其瞿鑠なる壮士を欺く
且強記にして一度耳底に卸すものは終身

忘多ゝ事をし翁幼より多聞を好ミ偶々沼
乱興廢の談ふ及ざい翁耳を清し沈黙して
談の終るふあらぎ是ハ敢て去らぢと予山
中ふ留る事數日翁と往来して閑話期無く
月落雞曉を告るル談更ふ止ぢ故ふ此書を
編をるふ當り翁の力頼りて餘りありとも
此辺ふハ尋ね人名跡ル有ぎ是ハ是より
新湯の景況を探るべし

○新湯　湯元塩原の部内なり此處ハ塩原山
中ふて人煙隔絶の地ふして別ふ一畫を
為を方位ハ門前古町辺より西南の山上ふ
方りて三條の通路あり一ハ塩湯より一ハ
古町より行程一里十八九町何を九々折
なる山道ふして芦萩の類徑路を埋め辛く
馬足の通ぢるのミ路の傍ふ大沼小沼とて
二の池沼あり小沼ハ蒹葭生茂りて水色を

見に大沼ハ常ふ水湛へて竪五六町横二町許り鮒鰻の類を産すと云ふ山上魚類を産するゝ点一奇一ハ上塩原より是ゝ一里半余の山道なる上前の二道ふ比を望ベ登り易きを覺ふ且道幅ゝ稍廣くして荊棘道を塞く等の事あるなし此道と前の二道を以て新湯の首尾を串く浴槽ハ上湯。中湯。寺湯。狐湯。の四坪硫煙の氣山靄ふ和して人の鼻

孔を穿つ故ふ主治中癬疥を尤とす此上湯中湯の二槽ハ他の湧湯と異なり後の方ハ一面硫黄山ふて處々より硫煙を吹出す其洞穴へ水を注き入る硫黄の火氣ふて水を沸騰せしめ更ふ樋を通して浴槽へ引入る仕掛なるハ恰ゝ人工温泉のやうふ思ハる都て温泉ハ土中ふ火石ありて水を温め其水又土中ふ含まある種々の鑛物を吸入し

始て藥泉と成物なきい其吸入をる鑛物の種類ゑ因りて病ゑ適不當のあるものなり併し目のあたり見へきをい人々其原因を知らざをども硫黄穴へ水を注きて其水を温むるも理合ゑ於てい敢て異なる事なし客樓い藤屋。下藤屋。鶴屋。蔦屋君嶋屋。大黒屋。亀屋菊屋。の八戸相接して簷を連ぬ此八戸ゑて湯元塩原の一村を為と云ふ家の構へい福渡戸辺と同く皆二階造りゑて可なり手廣く山間ゑい珍らしき普請なり予中上塩原の両村を經此ゑ来りて以ひらく中上塩原い村内も廣く戸數も多けをと矮少の茅屋のミゑて一の見るべき物有ざをども湯元塩原い僅々八戸の小村ゑて此家屋を構へ得るい單ゑ温泉の洪益ある故ならん天道何ぞ人ゑ幸福を與ふるの偏倚なるや

然れども此村は別に耕すべき田畑とても
無く夏秋の間は浴客を遇し冬より春に至
る迄獣猟を業として生計を營むと云へり
但大根は此地の名産なり地形は至て狹く
東南に山を負ひ西北は稍開け閑雅幽静の
地にして實に三伏の暑を避け採薪の病を
醫するには無比の浴場と云べきなり夫温
泉の病に利ある固より言を待たと雖も人

家稠密の場所に於て飲食を恣にし酒肉を
叨にする時は縱令無病の身體にても病を
釀し災を招くこと自家にありて勞動する
時よりも更に大なりと雖も古人も浴場は物
不自由なるこそ好けれと云れとうさぎば
病によりて温液を撰ぶも大切なれど主と
して其場所を撰ぶ事こそ肝要なれ此地の
如きは古人の金言に背らざる處と云へり

新湯之真景

曾て聞く是より七八九町距て西北の方ふ元湯と云ふ所あり矢張湯元塩原の部内ふ属せ此度ハ塩原山中ふても最初ふ温泉の開けよる所ふして昔ハ家數八十余戸浴槽七坪ありしろ万治二年の大地震ふ遭遇し家屋潰え温泉涸て居住成難く各々一家を纏め門前古町或ハ畑下戸塩竈等へ引移り只八戸のミ残りて今の浴室を開せし故ふ

新湯と唱へけるとぞ當所の温泉社ハ則元湯より移しよる者ふて神躰ハ正觀音なり其廚子の中ふ安元元年の銘あり今を距ること殆と七百年ふ及べり以て此地開闢の遠きを證せべし是ふて荒々書終りと雖ど一二の名瀑あ雖ば序ふ筆を染ぬ塩湯より鹿俣川を九四五町遡せハ飛泉並ひ懸るを一番龍と称せ左ふある者ハ雄奔猛飛勢ひ

長蛇の如く右ふある者ハ幽濺奇瀉其形狀
垂玉ふ似て自ら雌雄の趣を為ス又數町の
水上ふ懸るを二番瀧と唱ふ直流二十余丈
幅十二三間一瀉谿ふ滿て玉山の崩るゝが
如し予觀瀑の癖あるども多くハ危嶮峻凄
凜然として心慄き躰震ふ此二瀑布の如き
別風致ハ未と曾て見聞せざる所なり遊客
入浴中の徒然ふ尋て一覽あるべし穴賢

地名	湯名	功能
大網	大網湯	●きりどく●ちゆうふう●ドあつ ●ヨんあん●せんき●ふやく
福渡	岩湯	●ふくつう●ヨびやう●せんき ●つうふう●ゐつけ●すばく
同	冷湯	●のぢせ●つつう●めまゝ●とん ●ふやく●トあつ●くさあき
同	淡湯	●ヨんびやう●せんき●ふくつう ●ちゆうふう●きむきあとり
同	鰥湯	●せんき●ふやく●ちのえち●ぞうあん ●らうふやう●うちえ●やけど

塩竈坂下湯
●せんき●ちゆう●むしし●ふんびやう●むし●あつけ

塩湯塩湯
●ちゆうふう●つうふう●ちめこち●づつう●ふくつう●ちやく●あつけ●うちこ

同鬱王湯
●むし●せんき●すばく●ぬおやく●あつけ●ねいびやう●ようどん●ぷうあん●ドちつ

畑下本湯
●せんき●づきろ●ちあと●ーやうあち●ごゃん

同中湯
●のぞせ●づつう●めまへ●けんひき

同鳩湯
●きうどく●きうきつ●せんき●うちこ●ふんびやう●やけど

同猪湯
●ちゆうふう●むし●ちやく●ぷうあん●せんき●すばく●あつけ●やけど

須巻瀧湯
●のぞせ●づつう●めまへ●けんひき●むねのつゃへ

門前自樂房湯
●ドちつ●ねきもの●きうどく●やけど

同下湯
●のぞせ●けんひき●づつう●めまへ

同河原湯
●せんき●すばく●ぷうあん●つうふう●ドちつ●あつけ

古町不動湯
●がんびやう●ちのこち●きうどく●ふうあい

同 瀧湯 ●のわせ●づつう●がんびやう ●ドちつ●くちのやまへ

同 中湯 ●せんき●すばく●ちゆうふう●つうふう ●ゐうゐん●うんひやう●ちやく●あつけ

同 角湯 ●づきう●きうきつ●きうどく●うちこ

同 御所湯 ●ちのこち●よいどく●やけと

新湯 上湯 ●ちやく●せんき●ちつ●あつけ ●ゐうゐん●すばく●できもの

同 中湯 ●のわせ●づつう●めまへ●へびくひ ●ちつ●ちあと●きうきつ

同 寺湯 ●せんき●ちやく●ゐうゐん●ゐんびやう

同 猪湯 ●あつけ●ドちつ●つうふう●ひうとん

塩原山中物産

○鹿○猪○山雞○川鳥○山鮎魚○鯢魚○河鹿○葛粉○蕨○天狗蕨○獨活○椎茸○松茸○香茸○マイ茸○一本シメジ○石斛○湯瓶艾○洗土○湯花○諸財木類

五名石

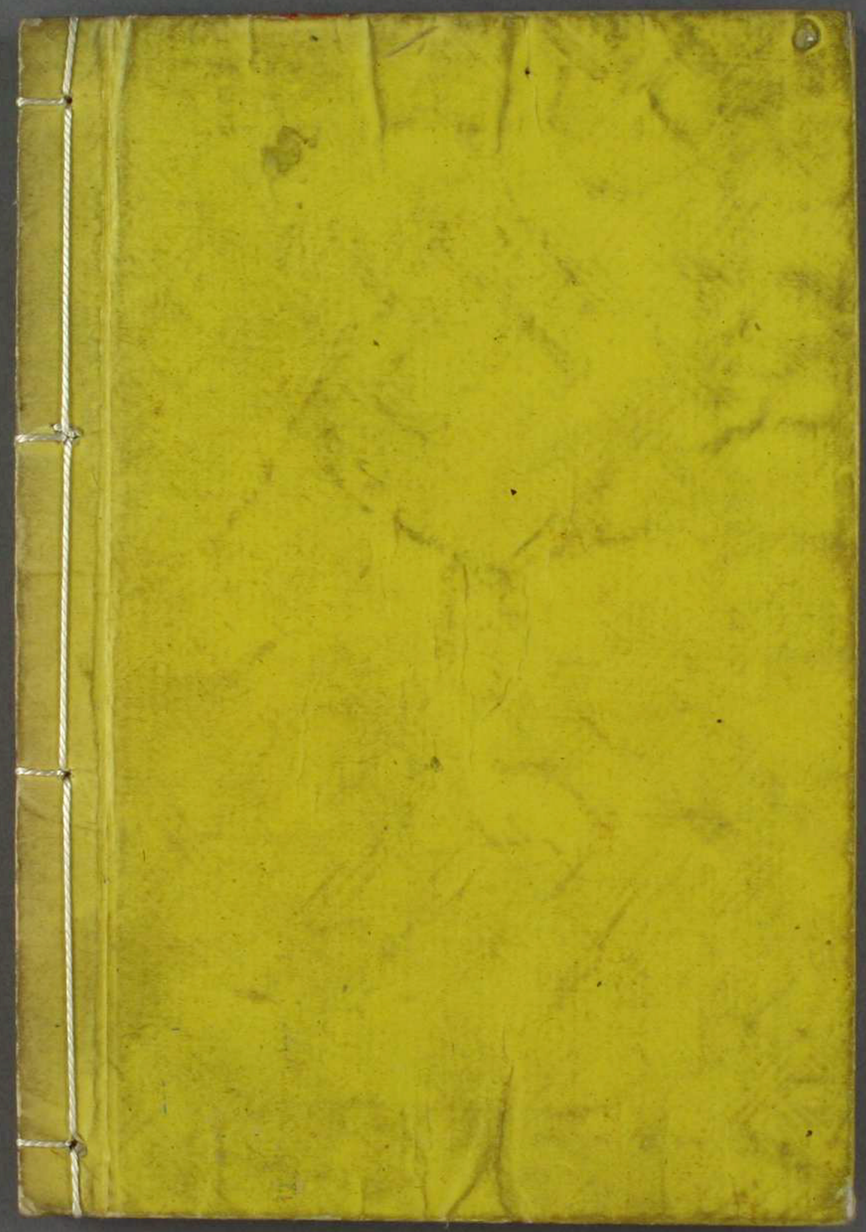
○木葉石○鮫石○松乳石○芋石○貝石

右各々形の相似たるを以て名附明治十六年東京博覧會へ出品せ

下塩原村門前ヨリ各地ヘ至ル里程

○関谷ヘ　二里三町十三里　○三嶋ヘ　六里　○白河ヘ　十七里　○大田原ヘ　七里　○喜連川ヘ　十一里　○矢板ヘ　七里九町　○阿久津川岸ヘ　十三里　○宇都宮ヘ　十六里九町余　○日光ヘ　十六里九町余　新湯ヨリ高原ヲ越ヘ藤原今市ヲ経テ日光ニ至ル十四里　○上三依ヘ　四里三町　○横川ヘ　五里　○會津若松ヘ　九里四

明治十八年十二月十日御届
同　十九年四月二十四日出版

宮城縣平民
編輯人　錦　石秋
磐城國伊具郡角田三百九八番地居住

栃木縣平民
出版人　君嶋玄一
下野國塩谷郡下塩原拾七番地居住